

表紙のことば

ゴッホへのオマージュ『ひまわりの子ら』1983年

細江英公

フランス南東部の古都アルルは古代ローマ帝国の支配下にあったころコンスタンティヌス皇帝の城があったところだが、今では、すっかりゴッホと写真の国際フェスティバルで有名である。まずアルルといえばゴッホの「ひまわり」を思い浮かべる人が多いようだ。今でもアルルの郊外には見渡すかぎりのひまわり畑が広がっている。

そして世界の写真家たちに良く知られる写真の祭典「Rencontres Internationale de la Photographie=R. I. P.」（アルル国際写真フェスティバル）が毎年六月半ばから八月の半ばまで開催される。その二か月の間に大小とりまぜて三十から五十種類の写真展が美術館や街中のギャラリー、あるいはホテルのロビー、広場での野外展など開かれ、さらに、さまざまなテーマをかかげたワークショップが行なわれる。一日だけのワークショップ、三日間のもの、一週間のものなど二十ぐらいあり、各国の写真家たちが講師として招かれて教えている。私も招待されて1976年から今までに五回ほど教えにいらっている。生徒も世界各国から集まり、日が暮れると街の中心にあるフォルム広場のカフェには色とりどりの国際的な写真家たちの顔が見られる。アンドレ・ケルテス、アンセル・アダムス、アルバレス・ブラボー、ラルフ・ギブソン、ウィリアム・クライン、ブルース・デビッドソン、ジェリー・ユルスマン、ルース・バーンハート、ルシアン・クレルグ、エドワール・ブーバ、等々……、まさに国際的写真家の出会いの場所である。

表紙の写真「ひまわりの子ら」は1983年に招待され一週間のワークショップを教えた時の細江英公作品である。わたしのテーマは毎回「裸の学校・野外ヌード」で、いつも男女各三人のモデルを用意してもらっている。モデルたちはボランティアの写真学生が主だ。十五人の学生をアルル郊外のひまわり畑に連れていき、まず、先生の私がどのように写真を撮るか、どのようにモデルの位置をきめて撮影するか、そして、この写真のテーマは「ゴッホへのオマージュ」だ、などと大声で説明しながら、モデルを道端に並べて、隣の畑からちぎってきたばかりのひまわりを口に加えさせて、35ミリ二本ほど撮影した。その間、学生たちは私の撮影中は後ろでじっと見ている。この撮影時間はわずか五分くらいだが、この短い撮影が私にとっては自分の作品づくりのための貴重な瞬間なのだ。

この写真は上部が窄まっている台形画面だが、これは、引き伸ばしの段階で、イーゼル上の画面の上部を持ち上げて画面上部の引き伸ばし倍率を小さくしたものである。倍率の差を大きくすると画面の一部しかピントが合わないから、そこで、引き伸ばしレンズの絞りを最小にして、被写界深度を深くしなければならぬ。ピントの位置は上部から1/3くらいのところに合わせるといい。ニコンやライカで撮影したネガをフォコマート引伸機にかけると、この写真のようにうまい具合に黒線がでる。ただし、ネガをトリミングすると黒縁は出なくなるから、撮影時にしっかりと最終の構図を決めて撮ることが肝要だ。

さて、この写真は、後日アルルのゴッホ財団からの求めに応じて寄付をした。紀要の読者で、いつの日かアルルを訪れた際には、アルル市内にある財団の美術館にぜひお立ち寄りのほどを。